

子供たちの建築的素養

磯村克郎 | 静岡文化芸術大学教授

大学研究室の立場から様々な静岡県の事業に参画・デザイン提案をしています。テレワーク住宅の普及を目的とした事業*1では、プロジェクトの一環として、小学生を対象とした住教育のワークショップを学生と一緒に行いました。舞台は、コモンスペースなどを備えた豊かな敷地にテレワークのモデル住宅を配置した住宅地*2です。

ワークショップは、モデル住宅の外内に隠されたお菓子を探し出すための作戦会議場所や探すルートをジョイントマットで作っていく、というものです。

用意した敷地地図は、建築の平面図を基本にしたものでしたが、子供たちは、通ってきた玄関や階段を辿って現在地を把握し、その定位感に驚かされました。子供なりに図面を読み込んでいるのです。



活動を始めると、ジョイントマットを縦横、立体的に使いこなし、テレワーク住宅の中に思いがけない会議場所を発見し、家具をつくり、(お菓子欲しさとはいえ、)庭にまでルートを延ばしていきます。階段下の隅の物入れが快適だと、扉を開けて奥までルートと居場所を作っているのには笑われました。お菓子を発見したら、デッキや隣同士の裏庭で楽しそうに食べています。出来上がったルートや家具や居場所は、モデル住宅に設定していない回遊動線やニッチや共有庭を視覚化していました。

ここでは、子供たちは潜在的で創造的なユーザーであり、将来的な建築の有望な担い手だという見方を建築士のみならずと共有できそうです。

注釈

*1 静岡県くらし・環境部建築住宅局住まいづくり課 プラス0(オー)の住まい

*2 (有)アーバンセクション、大河原建設(株) しまだみそらガーデンプレイス



1959年山口県生まれ。1982年九州芸術工科大学芸術工学部卒業。デザイン実務を経て2009年4月から教員職。文化・芸術研究センター長。静岡県景観アドバイザー。静岡県のテレワーク住宅やランドスケープデザインプロジェクトなどに参画。専門は公共のデザイン。芸術工学会理事。

熱いところを持ち続ける

金丸智昭 | 一般社団法人静岡県建築士事務所協会会長

今後の建築士といわれると自分がそのカテゴリーに入っているのかと考えてしまう。

建築士を取得して35年が経ち、その時々携った設計は時代のニーズ、敷地環境、仕事環境によって随分変化してきたように感じる。また設計を行う過程においても、大学卒業してしばらくはドラフターに向かい、トレシングペーパーに製図用のペンで描いていた。消しゴムを擦って原図を破いたり、コーヒーをこぼしてまた書き直したりと今から思えば効率が悪いくらいのところもあったが、線一本から描きだされる図面への思いは今より強かったと思い出される。そして数年後にパソコン上でCADを使い図面を書きだし始めた。図面作成ではコピーを駆使し随分省力化には役立ったが、間違っただけで上書き保存を何度もやって一から書き直すことも多かったなと思い出される。

今でもCADで図面を書いている建築士が多いと思われるが、近年はBIMを駆使して設計を行うことが求められてきた。BIMは設計作業の効率化がさらに進み、さらに設計をわかりやすく表現できるため、お客様とイメージを共有できるツールだ。しかし、線一本一本を描く手書きやCADに対して、立体データを作成していくといった今までの延長線上ではない手法で設計を行わなければならない、多くの建築士が導入や本格移行に苦慮しているのが正直なところだ。また建築への省エネルギー対策も避けては通れなくなり、ZEBやZEHへの取組もますます求められていくだろう。このBIMや省エネ対策こそが、今後の建築士といわれる踏み絵になっていってしまうのではないかと、という危機を感じずにはられない。

しかし建築士は本来、建築を通じてお客様にこちよ空間、安心安全な空間を提供できる能力を持った専門家である。設計によって健康であったり、心豊かに暮らせたりと人々に幸せを提供できる、そんな誇れる職種であると思う。お客様一人ひとりにあった建築を提供する、設計の過程の中で一番大事な部分をしっかりと持ち続けていくつになっても失ってはいけないところなのだ。学生時代に憧れた設計の道を歩んできてるわけだが、時代とともに求められるものが変化する中で、設計に熱い信念を持ち続ける建築士であり続けてほしい、そして設計を楽しんでほしい、そう願っている。



1962年静岡県生まれ。1985年日本大学理工学部卒業。東京にて設計事務所に勤務後、1994年に株式会社金丸建築設計事務所入社。一級建築士。(一社)静岡県建築士事務所協会は、中部支部長、副会長を経て2022年に会長に就任。現在、建築審査会委員、建築士審査会委員、日本建築防災協会評議員、静岡県建築士会会員。